

新学部長に 聞く

Shiroshi Takao

Shiroshi Takao

Shiroshi Takao

Tamaki Toshiaki

Shiroshi Takao

総合科学部長 石川 榮作
未来を切り開く「総合科学」「地域科学」の推進

医学部長 玉置 俊晃
医療人を目指す皆様へ

歯学部長 市川 哲雄
創り、支える口腔科学―持続可能な健康長寿社会のために―

薬学部長 際田 弘志
薬学部が目指す人材育成

工学部長 大西 徳生
歴史と伝統の工学部

―国際的に通用する技術者育成と独創的な研究拠点を目指す―

徳島大学では、この4月から各学部の学部長が新たに就任いたしました。今回の特集では、新しく学部長に就任した5人の方々に、今後の展望と学部運営に関する抱負について、原稿をよせていただくことにいたしました。



未来を切り開く

「総合科学」「地域科学」の推進

総合科学部長 石川 榮作

昭和61年度に教育学部を改組して発足した総合科学部は、当初は一学科体制でしたが、平成5年度からは二学科体制に移行し諸科学の総合・融合を目指してきました。しかし、その後の社会の大きな変化に伴って、平成21年度には人間文化学科、社会創生学科、総合理数学科の三学科体制に改組して、「知の総合化」をさらに推し進めていくことになりました。総合科学部の特徴は、文系・理系のあらゆる分野の教員が揃っていて、豊かな人間性を培いながら、幅広い視野と深い専門性を兼ね備えた人材養成を行っているところにあります。その教育の根底には従来の人文・社会・自然の三つの学問分野の枠を超えた「総合科学」の推進があり、まさにこの「知の総合化」こそ未来への道しるべであり、ますます社会が錯綜する中で輝かしい未来を切り開いていくためには必要不可欠なものです。

平和21年度には学部・大学院の改組で大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス(SAS)研究部が発足するとともに、大学院総合科学教育部も設置されました。博士前期課程には地域科学専攻と臨床心理学専攻を設け、博士後期課程には地域科学専攻を設けています。「地域科学」は文系・理系のさまざまな学問分野を包括するもので、学問的な意義はその学際性と総合性にあります。「地域科学」は、すなわち、「総合科学」です。SAS研究部では各教員がそれぞれの専門性を深めるとともに、他の分野との融合を図りながら、「総合科学」「地域科学」を推進して、「活力ある地域づくりに貢献したい」と思います。夢のある未来を切り開いていくには、「総合科学」「地域科学」が是非とも必要です。夢は「見る」だけのものでなく、「実現させる」ためにあるものです。SAS研究部は、「夢の未来を切り開こう」という意欲に燃えて、夢の実現にチャレンジする人の力になりたいと願っています。



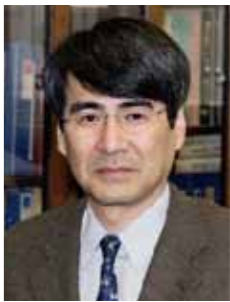
医療人を目指す 皆様へ

医学部長 玉置 俊晃

徳島大学医学部は、四国で最も古い医学部として指導的な医師や医療人を多く育成し、四国地域を中心に全国各地の地域医療に大きな貢献を行ってきました。また、研究大学として医学・医療の進歩・発展のために多くの生命科学に関する情報を世界に向けて発信するとともに、世界最高レベルの若手研究者の育成に取り組んできました。

情報技術や交通手段の発達に伴い、世界のグローバル化が起こり医療教育の世界にもグローバル化が進んできました。グローバル化に伴って、20世紀後半からの急激な生命科学の進歩に伴い医学は加速的に進歩しており、高度先端医療は日ごとに進歩すると共に目まぐるしく変化しています。医

師にしろ、栄養士にしろ、看護師にしろ、放射線技師にしろ、臨床検査技師にしろ、医療人を目指す皆様は、この医学・医療の急激な進歩に対応していく事が求められます。徳島大学医学部医学科の教育理念・目標の(1)には、「科学的根拠に基づいた医療・研究が行えるように自己開発と自己評価の習慣を身につける。」と記載されています。現在の医学・医療の急激な進歩に対応していくためには、学生時代においても受動的に知識や技術を身に付けるだけではなく、自己開発と自己評価を行うための自学の必要があります。今、習った知識や技術は5年後や10年後には、役に立たない知識や技術になる可能性があります。社会貢献出来る医療人として活躍して行くには、自分に必要な知識や技術を常に吸収していく姿勢が不可欠です。このために、学生時代に自己開発と自己評価の習慣を身につける必要があると、私は考えています。かわいの子供に旅をさせるには、多くのFish/Meatを持たせるよりFishing/Huntingの知識・技術を身につけさせるべきです。



創り、支える口腔科学 — 持続可能な健康長寿社会のために —

歯学部長 市川哲雄

歯学部は1976年に全国で8番目の国立大学歯学部として設置された四国で唯一の歯学部であり、今年で35年目を迎えます。

2007年には、超高齢社会における健康長寿の推進に貢献すべく、歯学部に加えて、歯科衛生士および社会福祉士の2つの国家試験受験資格が得られる国立大学法人として4番目の口腔保健学科が設置されております。今春卒業した1期生の社会福祉士国家試験合格率は、209施設(受験者10人以上)中8位といったすばらしい成績でした。

国立大学法人では機能分化が求められております。蔵本地区は多職種にわたる医療人と研究者の養成を担う生命科学の一大教育・研究拠点を形成していること、徳島県は深刻な高齢化と糖尿病をはじめとした生活習慣病への対策が急務なこと、歯学部は社会福祉学、

理工学などの人材も有し、蔵本地区では唯一、文理一体、医工連携の教育を進められる環境になっていることが特長としてあげられます。本学部の独自性は、このような背景を基盤とし、2010年から始まった第二期中期目標・計画期間中の行動計画の標語に、「創り、支える口腔科学—持続可能な健康長寿社会のために—」を盛り込みました。そして、教育では、Inter-Professional Education (IPE)・専門職連携教育、標準化あるいはマニュアル化などの形式知の伝達法の長所を生かしつつ、暗黙知の伝達ができる「手渡し教育」などを積極的に進めています。地域の中核になりうる医療人、国際的に活躍できる研究者、医療人になるための学部教育に特に力を入れる所存です。

最近の歯学部単独の実績では、文部科学省の特別経費で「連携機能を活用した口腔からQOL向上を目指す研究」、「ICTを活用した地域実践型の口腔保健教育による高度専門職業人育成」が、科学研究費関係では最先端・次世代研究開発支援プログラムライフサイエンス系において、四国地区で唯一「イメージング技術を用いた臓器特異的自己免疫疾患の病態解明」が採択されています。国際連携においてもインドネシアのバリ島で、新潟大学とガジヤマダ大学の3大学で国際シンポジウムの開催、フィンランドのヘルシンキメトロポリア応用科学大学との学生の相互訪問など積極的に展開しております。

全教職員が結束して教育・研究・臨床を充実し、徳島大学の一員として、日本の歯科医療、歯科医学を担う一員として、世界の歯科医療を指導する一員として特色ある歯学部を目指しております。



薬学部が目指す 人材育成

薬学部長 際田弘志

本年4月1日付けで薬学部長を拝命しました。ご存知のように我が国の薬学部は平成18年度より新しい教育制度がスタートし、6年制の薬剤師養成課程と4年制の創薬研究者養成課程となりました。徳島大学薬学部も他の国立大学と同様に6年制の薬学科(定員40名)と4年制の創製薬科学科(定員40名)の並立となり、今年度で6年目を迎えます。全国の薬学部が始めての経験で模索する中、最も重要な課題である4年次の共用試験や5年次の病院実習・薬局実習も関係各位のご協力によりお陰様で何とか道筋を付けることができました。いよいよ1期生が最終学年を迎え、6年次の卒業研究の充実と3月に行われる新国家試験に向けた対策が残された課題です。さらに学部の改組に伴い大学院の改組も課題です。4年制の創製薬科学科の大学院のうち2年の博士前期課程(修士課程)は既に設置されておりますが、その上の博士後期課程(3年)と6年制の

薬学科の上の博士課程(4年)の設置が現在計画中です。これら2つの大学院博士課程をそれぞれ特徴付け充実・発展させることが今後の課題です。これまでは徳島大学薬学部は国立大学唯一の工学部を発祥とする薬学部として創薬重視の教育・研究を特色としてきましたが、昨年度より従来の薬学教育に不足していた臨床面での教育・研究を強化するために、3研究室を医学部・歯学部とともにHBS生命科学棟(旧第3病棟)に移設しました。これは全国初の試みであり、これからは従来の創薬の伝統に加えて医療系施設が集中する蔵本地区の地の利を生かした臨床重視が徳島大学薬学部の新しい特色になりつつあります。このような他大学にはまねのできない特色を掲げ、徳島大学薬学部では最近新成長戦略として「インタラクティブ YAKUGAKUJIN 育成プロジェクト」を立ち上げました。インタラクティブ YAKUGAKUJIN とは聞き慣れない言葉ですが、幅広い知識や技能を身につけ多様な薬学の分野間で連携・対応しうる能力を持った人材を意味する徳島大学薬学部独特の造語です。今後はこれを徳島大学薬学部の主たる指針として教育・研究の更なる発展に努める所存です。

Shikawa Eisaku Tamaki Toshiaki Ichikawa Tetsuo Kiwada Hiroshi



歴史と伝統の工学部 — 国際的に通用する 技術者育成と独創的な 研究拠点を目指す —

工学部長 大西徳生

徳島大学工学部は、徳島高等学校を前身として大正11年に創立されて、昭和24年に新制大学となり、現在は、学部7学科(定員645名)、大学院博士前期・後期課程(定員328+53名)3専攻8コースの組織に拡充し、毎年約1000名の学生が卒業、修了しており、現在までの卒業生、修了生数は約3万名にのぼります。

本学工学部は、徳島高等工業学校時代よりの「実践力のある独創的な技術者育成」を目指した建学の精神が引き継がれており、入学した学生のレベルアップが大きく、卒業(修了)生は優れた技術者・研究者として産業界、教育関係、官公庁など多くの分野で活躍して



います。

工学部では、豊かな人格と教養、工学基礎、専門基礎を身につけて社会の変化に柔軟に対応できる自律的応用力、創造力の育成を目指しています。工学部の教育レベルの質は高く、すでに、7学科中6学科が JABEE (日本技術者教育認定機構) 認定を受けて、国際的に通用する教育プログラムであることが認められています。優秀な学生に対しては、日亜奨学生制度があり、勉学に専念できる環境下で、国際化時代に対応でき、より実践力のある独創的な高度専門技術者育成を目指した特別教育プログラムを設けています。大学院博士前期課程は、学部卒業生の半数を超える学生が進学し、学部教育からの6年一貫教育と卒業研究に続く研究活動を通じて、社会の要請に応えた即戦力のある中堅技術者を養成しています。博士後期課程は、さらに特化した専門分野の研究者として、大学、高専の教員や企業等で活躍する人材を養成しています。本学部・大学院では、グローバル化時代を迎え、国際的に活躍できる自律した技術者・研究者の育成に力を注いでいます。工学部、大学院のさらなる発展に向けて、

魅力ある研究に刺激を受けた意欲ある学生を迎え入れ、研究心の強い学生を育てる教育を通じて、世界的レベルの研究者、国際的に通用する技術者を育成するとともに、工学部の使命である産学連携・地域貢献にも積極的に取り組みます。具体的目指す取り組み項目を次に示します。

組織見直し
夜間主コースの改組および大学院教育研究体制の充実を目指します。

教育質保証
学部卒業生の質保証試験制度の導入と大学院教育の実質化を目指します。

教育国際化
JABEEの全学科認定と大学院ダブルデイグリー制度等による教育の国際化を目指します。

重点的研究
光ナノテク研究、医工連携研究、資源循環研究の各分野の研究を推進します。

研究者支援
科学研究費等の外部資金獲得支援や若手研究者の海外派遣支援体制を目指します。

教育研究環境
研究センター棟建設、教育研究設備、キャンパス整備の充実を目指します。

地域連携支援
とくしま地域産学官共同研究拠点事業など組織的な地域連携を支援します。

広報活動充実
科学体験イベント、ラジオ番組、TV番組等で工学の魅力を発信します。